

「最も大切なこと」

2023年2月26日

コリントの信徒への手紙一 15：1～11

佐々木 佐余子

今朝は主イエス・キリストの復活を学びます。今、レントに入ったばかりなので少し早いかしらとは思いますが、テキスト通り学んでみたいと思います。主イエス・キリストの復活は信仰のかなめですので、ここを押さえておかないとすべてあやふやになるのです。題の「この最も大切なこと」によって教会は立てられたのです。この「最も大切なこと」をパウロだけではありません、主の弟子たちが生き証人として生々しく鮮明に証したのが福音書であり数々の書簡なのです。「最も大切なこと」をわかりやすく箇条書きにすると①主イエスは聖書に書いてある通り、わたしたちの罪のために死なれたこと②は主イエスが陰府にくだり葬られたこと③は聖書に書いてある通り復活してくださったことです。この3つは信仰の3本柱です。パウロやペトロ、ヨハネ、ヤコブ他の使徒たちは、自ら死を持って血を流して証したのです。以下一つ一つ考えたいと思います。①つ目は聖書に記されている通り、イエスさまが死ななければ救いはこないのです。身代わりではいけないのです。他の人ではなく、必ずナザレのイエスでなければならぬのです。そして、②つ目は必ず葬られなければなりません。野ざらしではいけないのです。そして、陰府にくだらなければなりません。陰府とはどのようなところでしょうか。聖書の巻末のところ、42ページに書かれているので読んでみます。陰府 死者が集められる場所で、地下にあると思われていた。この語は旧約では65回、新約では10回使われている。イエスも死後は陰府にくだりそこから復活することによって死の力をうちくだかれた、とあります。そして、③つ目は復活されたということです。ペトロが墓をのぞくと、イエスさまに巻かれていた亜麻布がほどけてありお体がなかったのです。この亜麻布がほどけてそのままになってお体がなかったということが最も決め手でした。もし、お体がそのままどこかに移されたのであれば、本当に復活されていたのかどうかわからなくなります。ヨハネとルカの2人が亜麻布のことを記しています。この復活がなければ伝道はすべて虚しくなるのです。次に5節を読むとこのように書かれています。「ケファに現れ、その後12人に現れたことです」と書かれています。本当は最初にマグダラのマリアに現れたのですが、その当時女性は数に入らなかったのがこのように省かれてしまっているのです。このマリアについては諸説ありますので、後ほどお話したいと思います。6節「次いで、500人以上もの兄弟たちに同時に現れました。その内の何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています」とあります。今、21世紀に住んでいる私たちは、正直500人の人々に同時に現われたと聞いて驚きです。けれど、今となっては実証不可能なことなので、パウロや弟子たちの尊い証を信じ恵みを与えられたいと思います。主イエスはどのように復活されたのでしょうか。でも、「見ないで信じる者は幸いなり」とイエスさまが仰っています。7節を読むとこうあります。「次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、8節そして最後に、月足らずで生まれたような

わたしにも現れました」と述べています。主の兄弟とは、イエスさまの実弟ヤコブのことです。このヤコブは母なる教会エルサレム教会の指導者となり62年に殉教しました。ステファノに続いて2人目です。初めは兄に対して反抗をしていたのですが、改心し続く者となりました。主の復活には二通りあるのではないのでしょうか。肉の体なる復活と霊体による復活です。話は変わりますが、前に某テレビ局の大河ドラマを見ていました。その中で江(こう)というお姫様が出て来て叔父の織田信長に質問するのです。織田信長がその頃、力があつたので権力に任せて非道なこともしていたのです。江は言います。「なぜそのようなことをするのですか、恥ずかしくないのですか」ととっちめます。するとそばで聞いていた千利休がこうたしなめるのです。「姫は傲慢だ、姫は何でも知りたい、わかりたい、自分は何でも理解できるのだ、と考えるけれども、世の中には自分の頭では到底理解できない、わからないことが沢山ある、そういうことを姫はわかっておられない、それが傲慢というものなのです」と言ったのです。それを聞いてハッとしました。わたしも若い頃は江のように思っていて、あの疑い深いトマスのように手でさわってみなければ信じることは出来ない、釘の跡をみなければ本当の主イエスだとはわからない、と考えていたのです。でも何よりも決定的なのは、使徒たちが殉教していったということです。ラビと仰ぐイエスが十字架上で無残にも死んでしまい、弟子たちは途方に暮れたのです。このまま解散するかどうかという時に、弟子たちは祈りました。一同が祈っていると聖霊が降ったのです。それから弟子たちは変わりました。あの弱いペトロが、主を裏切ったペトロが変えられ大胆にみ言葉を語る使徒とされました。それは本当に主の復活を見たからではないのでしょうか。一介の漁師であったペトロが多くの人々に説教しその話を聞いて次々と人々が仲間に加わったのです。復活の出来事がなければ理由のつかないことです。パウロにも主は現れました。パウロは月足らずと言っていますが、母親のお腹に十分養育されないまま、十分育たないまま、未熟で生まれてしまったこのわたしにも、つまり信仰的にもイエスを信じられなく、反って教会を荒らした未熟なこのわたしにも主は現れた、と言っているのです。主の復活を見た使徒たちは迫害のさ中にも伝道しやがて殉教していくのです。それは復活が原動力になったのではないのでしょうか。わたしの知っている人の話ですが、その方はあるキリスト教主義の学校の聖書科の教師でした。授業でその話をすると、生徒はばかばかしい顔をして騒ぐのでした。「先生、頭おかしいのではないの？ どうして死人が復活するのか。」と言って授業にならないそうです。そういう時、その先生はパウロやペトロやその他の使徒たちが復活を実際見て変えられていった話をするそうです。それが証拠ではないか、と話すそうです。10節を読むと、「神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」ときっぱり言います。わたしたちもそうではないのでしょうか。わたしたちも振り返ってみると神の恵みによって今日あるのです。ですから、いまさら教会はやめられないのです。今抜けたら、神からお叱りを受けるのではないか、と思います。今の10節のパウロの言葉を読んで「おやっ」と思

いました。「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働いた」というところです。パウロらしくない言い方です。ここは説明をしないと誤解を生むでしょう。表面的に読むと何か傲慢さも感じられます。でもパウロの真意はどのようでしょうか。ペトロもヨハネも他の使徒も主イエスのため多く働いたのでした。しかし、その後で、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです、とあるように神の恵みに力点があるのです。このような月足らずで生まれたものにも、神は恵みを注いでくださり神が働かせてくださった、感謝だと述べているのです。顧みて教会に連なるわたしたちも、神さまの恵みによって救われ、ここに集められ神さまのご用に用いられていますのは感謝なことです。11節に「とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした」と言っておりますが、彼らとは誰でしょう。この彼らとは使徒たち全員のことです。使徒たちは主の福音を全身で受け留め証し伝道し告白しているのです。そして、使徒ばかりではなく、コリントのあなたがたも主の復活こそが福音の基礎であると信じたのだ、と言っています。

先ほどのマグダラのマリアの話をしたいと思います。福音書を読むと、マタイもマルコムルカもヨハネもそうですが、主イエスが十字架に掛けられた時は遠回しに心配そうに見ていたのは女性でした。女性はローマ兵から見過ごされていたのです。何の力もないから捕まらなかったのです。それで逃げる必要もなく十字架を見守ることが出来たのです。女性の中にマリアが何人かいて、特にマグダラのマリアがいました。このマグダラのマリアは新説によると弟子フィリポの妹であり、女弟子として伝道の際大きな働きをしたとされています。どの福音書でも、復活された主イエスは最初にこの女性に身を現しました。ですから献身度が大きかったのでしょう。それから、「死んで陰府に降り」とありますが、イエスさまが陰府に降ったのはとても大きな意味があるのです。人は死亡すると誰でもいったん陰府に降るのです。それを陰府降りとよく言いますが、キリスト者でも他の人たちも皆、陰府降りするのです。そこで神さまから審問を受けるそうです。キリスト者だからすべて天国に行けるわけでもないらしい。何故なら、「主よ、主よ、という者が天国に行けるのではない」とはっきり明言されているからです。主のみ心に適う人がいけるのです。この考えは公平だと思えます。キリスト者でもいろいろな人がいるので、悪いことをする人もいるし、たとえキリスト者でなくてもみ心に適う人もいます。マタイによる福音書7章21節にこうあります。「わたしに向かって、『主よ、主よ』という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである」このみ言葉は座右の銘です。

カトリックの神学者でカール・ラーナーという人がいます。彼は『無名のキリスト者』という本を出しました。この本の中でこのように言っています。「たとえ、イエス・キリストに対して信仰告白をしていなくても、或いはイエス・キリストを否定していても、その人の実際の生き方においては、キリストによる神の恵みにあずかっていると思われる人を、キリスト教信仰の立場からみて、『無名のキリスト者』或いは『匿名のキリスト者』だ」と言っています。その人は自分がキリスト者であることを隠しているのではなく、むしろ、キリス

ト者という名の無いキリスト者なのだ、と言っているのです。20世紀の人です。ラーナーが主張するのは、「キリスト教は人間のために定められた絶対的な宗教であり、どんな他の宗教も認められない」と言っています。宗教といっても人に悪さをする宗教がありますからね。そのような宗教にはまったら大変な事になるわけです。けれども、皆が皆教会に行けるわけではありません。キリスト教はどうもバター臭いと言って敬遠する人もいるでしょう。日本食の神社やお寺さんがいいわ、という人もいるでしょう。ラーナーが言うのには、神はすべての人が救われることを望んでいる。その神の救済が最終的にイエス・キリストに啓示されているということは、たとえ、人間が誤った選択をしても、それを克服し贖う救済が、キリストの救済なのだ、と言っているのです。たとえ、人々がキリスト教以外の宗教を信じたとしても、神は何らかの救済の手立てをされる、というのです。他の宗教を信じたならその人は絶対救われないということはない、と考えているのです。

パウロはどう見ているかという、使徒言行録17章22節にパウロがアテネのアレオパゴスで説教している箇所があります。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあついでであることを、わたしは認めます。」と、パウロは異教を信じることを認めているのです。しかし、『『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけた』、と言い、自らの信じている信仰の優位性、正統性、絶対性を宣べたのです。パウロは「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう」と言ったけれど、嘲笑う人もいました。しかし、アレオパゴスの議員ディオニシオやダマリズという婦人やその他の人々は信じたのでした。アテネでは至る所に偶像が立っており、その偶像によって人が救われるなどはとても考えられないとパウロは考えていました。「さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます」と説教したのでした(30節)。教会は、他の宗教に対しては寛容・謙遜でありつつ伝道しなければと思います。

「最も大切なこと」は主の受難を通して起こります。レント開けはどんなにうれしいことでしょうか。